

評者: 山内 昌之 (東京大学教授)

一 知半解の事情通に対する痛烈な批判

一九八四年以来、アフガン難民の医療に従事する著者の指摘には、ずっしりとした重みがある。

前書の「ペシャワールにて」に続く、アフガニスタンやパキスタン現地の人との交遊と診察の貴重な記録である。最新のアフガニスタン情勢の紹介にもなっている。

欧米や日本から来た論客やボランティアのなかには、アフガン人の難民キャンプ生活を見て、「イスラムの後進性」や「男による女性虐待に金切り声を上げる」者が多いという。

こうした外国人の解釈や異文化論こそ、アフガン人の言動より「さらに解らない」というのが著者の感想である。これは一知半解の事情通にたいする痛烈な批判になっている。

「日本—アフガン医療サービス」の主宰者であり、アフガン国内ダラエヌールにつくった新診療所で文字通り生命を賭けて診療を続ける中村氏には、とくにアフガン社会の解放とか救済といった気負いはない。むしろ、戦火の恐怖で言語も失った人びとの病を癒し、高熱と全身の痛みで耐えられなくなった患者に少しでも「人間」としての誇りを取り戻させる。

中村医師の医療活動の信念は明快である。「べたべたと優しくするよりも、泣き叫びを放置して思い切り心の膿を出させる方がよい。事実と結果がもつとも雄弁である」

しかしこうした考えは時にスタッフに大きな忍耐力を強いる。ある外国人がやってきて「病院の無秩序と悲惨な女性患者の境遇」を嘆いたそうである。



評者: 山内 昌之 (東京大学教授)

しかし、中村氏は「即座にその意味が分からなかった」という。それは「瀕死の野良犬が人間に立ち直るのを大きな希望で見してきたからである」。それでも、せっかく治療したこのハンセン病患者が気管切開をして失語状態になってしまふ。極限状態を経験するのは患者だけではないのだ。

各種の会議にありがちな「無駄口と議論」への嫌悪と出席拒否も、著者ほど体験を重ねるとまるで自然な振る舞いに思えてくる。

どんなにつらい環境にあっても、ユーモアや余裕を忘れない中村氏の姿が随所に見いだされる。アフガン難民の治療に当たる日本人医師やレントゲン技師があまりといえぬあまりの現地民の対応に怒り始めると、唐の高僧・玄奘が仏典を求めてペシャワールあたりに来た時の言辞をさりげなく紹介する。「この地は人情が頗る悪い」と『大唐西域記』が記録しているというのだ。高僧でさえこの調子だから、「偉くもない我々凡人が簡単に解るものではない」。

仏教でいう「悪智」に陥らず、観念の格闘で終わらないようにしよう、という中村医師の勧めは、広くわれわれにもあてはまる素晴らしい警句ではないか。

それでも、「素直さ」だけは忘れないようにしたい、というのも素晴らしい。玄奘も「悪智」こそたななかったが、素直に悪口を末代まで記している、という指摘には思わず喝采を送りたくなる。クリスマスの日、ペシャワールに出た医師は患者五十人に「見たこともない高級の洋菓子」を土産に買って帰る。一週間分の食事代にもなるケーキを暖かいストーブの側で食べながら、談笑する光景は感動的である。久しぶりに笑顔が戻った患者を温顔で見守る中村氏のシルエットが、ストーブの明かりに照らされて浮かぶようである。

